

16 . ふたりの兄弟 (ミンダナオ)

昔々、スペイン人が私たちの土地を占領して、私たちの民を奴隷にする前、ママルとタンブナウェイというふたりの兄弟がいました。彼らは、タモンタカ川の近く、北コトバトの肥沃な土地に住んでいました。彼らの両親が亡くなってからずっと、兄のママルは弟を親代わりに世話していました。

ママルは、不平を言うことなく、兄弟の幸福と、しつけの責任を受け持ちました。なぜなら、彼はそれを自分の義務だとわかっていたからです。彼は、彼自身が両親がまだ生きていた時に教えてもらったことをすべて、タンブナウェイに教えたのでした。

彼はタンブナウェイに、どのように、またいつまでに、その土地に、彼らの作物であるさつまいも、カッサバ、タロイモ、さとうきび、カボチャ、豆類、バナナ、その他の野菜を、植えて、収穫するのか教えました。彼はタンブナウェイに釣り針と釣り糸の作り方を教えて、彼が近くの川で魚を獲れるようにしました。彼は、タンブナウェイに、彼らの小さな飼育場の鶏やブタや、他の動物たちの世話の仕方を、教えました。彼はタンブナウェイに、動物を捕まえて殺すためのヤリとナイフの作り方を教えました。

しかし、彼がタンブナウェイに教えた一番重要なことは、自然とそれが供給してくれるすべてのものと調和を保って生活することでした。繰り返しママルは言いました。「土地のことを、崇敬をもって取り扱うこと。土をだめにしないために作物を植えずぎるな。川の魚が減らないように、魚を獲りすぎな。食卓の食物にすることと、その革を使って布やロープを作るためだけに、動物を捕獲して、殺すこと。自分たちの娯楽のために、決して動物を殺すな。自然への敬意を示せ、そうすればお返しに、自然は豊かな食物でお前を世話し、支えてくれる。」

月に1度、ふたりの兄弟は、近くの町に行き、そこで彼らは自分たちのくだもの、野菜、干し魚、鶏などを、布、サンダル、道具、香辛料やほかのものとの交換しました。

そのふたりの兄弟は、土地や環境と調和して過ごし、素朴で、満足した生活をしました。そして、毎日、母なる大地の神様に、その豊かさを感謝していました。

ある日、ママルと若い弟のタンブナウェイが一日

の重労働の後、彼らの小さな家で休んでいると、近くの町に住むオモという名の老人男性がやってきました。オモは、ふたりの兄弟に、色鮮やかな服を着た、風変わりな男が、自分のことを「アーマド」と名乗り、遠い「アラビア」と呼ばれる土地から、どの町に来たことを話しました。「彼は濃い黒の口ひげと、長く、モジャモジャしたあごひげ彼の顔はほとんど隠れている。」とオモは言いました。

「それで、そのアーマドは何がほしいんですか。」とママルは尋ねました。「彼は私たちと貿易がしたくて来たんですか。」

オモは、彼の頭を振りしました。「彼は町の人びとに説教をして、彼が『アラア』と呼んでいる、彼の神様を信じるように、人々に頼んでいる。」

「でも、僕たちにはもう、たくさんの神様がいます。」とママルは答えました。「どうして私たちに他の神様が必要でしょうか。」

「アーマドが言うには、私たちが拝んでいるすべての神々は、二流の神々だそうだ。」とオモは説明しました。「だから、私たちのすべての神々は、全能であり、最高の神であるアラアを尊敬している。」

ママルはもう怒り出しました。「よくも、その風変わりな男は、私たちが礼拝している神々のいる土地に来て、そんなことが言えるものだ。私の両親も、その両親たちもみんな、神「トゥルス」を礼拝した。彼は私たち家族に豊かに恵みを与えてくれた。このように、よくわたしたちを導いてくれた神様を、どうして拒絶できるだろうか。そのアーマドに、私たちの地は、あなたを歓迎しないと告げてください。彼と彼の神は、アラビアの地に帰れる。彼の神は私たちのよりも良いと、言う彼は何者ですか。」

ところが、タンブナウェイは、そのよそ者を拒否するのではなく、彼の神様についてもっと知りたくなりました。「その神様アラアの掟は何ですか。」彼はオモに聞きました。

ママルは弟の方を向きました。「どうしてお前はそんな質問で時間を浪費し、暇つぶしをしているんだ。」

しかし、タンブナウェイは譲りませんでした。「私はその神様について、もっと興味がある。」と彼はママルに言いました。「知識を渴望することには、本当に何も損害はないのでしたね。それは、

フィリピンの神話と伝説

お兄さんが私に教えてくれたことの一つだったでしょう。」

ママルはため息をつき、弟にそっぽを向けました。

オモは、好奇心の強いアーマドの神様と彼の信仰「イスラム」と呼ばれているものについて、もっと話しました。「だれか、イスラムの信仰に移りたい者は、」とオモは言いました。「特別な儀式を行って、アラーにより、決められたいくつかの誓約をするのです。」

「その誓約とはどんなものですか。」とタンブナウェイは聞きました。

「人は、よい行いをして生活する誓約をしなければならない。」とオモが答えました。「また、人は豚肉を食べることを控えなければならない。また、人は、ひとりひとり、年に一度、30日の間、太陽の照っている間、断食をしなければならない。日暮れから夜明けの間にだけ食べなければならない。」

ママルは急に言葉を差しはさんで、「そんなばかげた決まりを作る神とは何者だ。」と彼は聞きました。「どうして、彼は地上にブタを作ったのに、そして、それを食べることを禁じるのか。全くわからない。そして、日の出の後で断食し、夜の間だけ食べることを目的は何だ。これはばかばかしい。そのよそ者と彼の風変わりな宗教には、何も用がない。」

ところがタンブナウェイは、兄の考えに同意しませんでした。「私はそのひげ男に会って、彼のアラーについて、もっと聞きたい。」

ママルは立ち上がり、彼の弟がそんなに強く同意しないことが、信じられませんでした。「弟よ、何を言っているんだ。私たちの神々は、私たちによくしてくれなかったか。神々は私たちの民、私たちの伝統、私たちの習慣、私たちの必要をご存知だ。そして、大地の女神は私たちを守り、決して私たちを飢えさせたり、のどが枯れることをお許しにならなかった。私たちは、私たちのことも私たちの民のことも知らぬ、見知らぬ土地から来た、新しい神など必要ない。」

しかしまた、タンブナウェイは、彼がアラビアからのよそ者に会い、そして彼の考えを聞きたいことを話しました。

ママルは、彼の弟が彼に同意しないことに大変心をかき乱されていました。そして、「お前はどうか

して、私に従わないのか。」彼は聞きました。「お前が小さい子どもの時から、私はお前の世話をし、お前を育て、私の知っていることはすべてお前に教えてきた。お前のためにこんなに尽くしてきた兄の犠牲に敬意を払わないのか。」

タンブナウェイは立ち上がり、安心させるように兄の方に手をかけました。「勿論、私は兄さんを尊敬し、愛しています。」と彼は言いました。「そして、ずっと兄さんが私のために払ってくれた犠牲と、私に伝えてくれた知識を感謝してゆきます。私たちは兄弟であって、だれにもその事実を変えることはできません。しかし、私たちや私たちの民を助けることになるかもしれない、他の宗教を学びたい私を、間違っているとどうして考えられるのでしょうか。」

しかし、ママルは怒って彼の弟の手を払いのけました。「お前は、よそ者である外国人がお前の考えに影響を与えることを容認している、タンブナウェイ。それは危険なことだ、私を信じてくれ。もし、お前が、お前の心と魂に侵入してくるアラビアから来た男の信仰を許すなら、それは私たちの家族や私たちの土地を分けることになる。私たちはここから離れて、アラーの毒が私たちを汚さない所を見つけなければならない。」

「お兄さんがこんな風を感じているのに申し訳ないけど。」タンブナウェイが答えました。「しかし、お兄さんには、私がお兄さんと会うのを止めることはできません。」

これはママルには悲しい日でした。「よろしい。」彼は弟に言いました。「もしあなたがそうしたいなら、ここに留まりなさい。しかし、私はアラビアからの、ゆったりした服を着て、顔にひげをはやし、心と魂に分裂を願っている者がいない場所を見つけに行く。」

タンブナウェイも、彼の兄が、その人と会いもせず、その言うことも聞かないで、激しくそのよそ者を退けることを悲しんでいました。「それは悲しいことです。お兄さん。」とタンブナウェイが言いました。「あなたの強情のために私たちが別れるのですから。」

「お前こそ頑固だ！」とママルがかみつきました。「兄の私に従うのを断るのだから。」

タンブナウェイは兄のことを怒らず、彼に暖かく微笑みました。「私はこう思います。このよそからの人は遠い所から旅をしてきました。私たちの生活に便利で貴重なものを持ってきているのか

## フィリピンの神話と伝説

もしねえ。私は彼に会わなければなりません。そうしないとずっと後悔するでしょう。私はここに留まって、私たちの農地を管理して行きます。私はいつもあなたに感謝するでしょう。お兄さん。あなたの愛と理解と願いのためには、あなたは出てゆくことはありません。しかし、私は勿論あなたの決断を尊重します。しかし、私の持つものはすべて、あなたにも属しているものであって、どんな時にも、私と分かち合うことを歓迎します。」

これは彼の生涯で最初のことでした。ママルは急に彼の弟と、彼の理解や思慮の度量の広さに、新しい尊敬の気持ちを感じました。彼は暖かくタンブナウェイと抱き合い、彼の頬を落ちる涙を止めることはできませんでした。

「わかった。」とママルは言いました。「そして、お前の同情を感謝する。私はそんなに遠くない丘に上がって、お互い近くになることになる。ここでは、私は気温が低く、違った土壌に合った、米や作物を育てる。そして、お前のように、私の持っているものは、お前にも属することになる、弟よ。」

ママルがタンブナウェイの所から去る前に、その兄弟は、子孫たちに教える厳粛な約束をしました。それは、お互いが尊敬し合い、違った考えの点、違った生活スタイル、を理解しあうこと、そして、いつもお互いに分かち合うことでした。この声明は、将来の世代にわたって、渡すことになるに違いありません。

そして、ふたりの兄弟はお互い別れて、片方は丘の上、片方は低い土地に住むことになり、お互い違った宗教と生活様式に従うことになりました。しかし、彼らは約束を忘れず、しばしばお互いを訪問し、米、とうもろこし、野菜や果物を贈り物に運びました。そして、彼らのお互いに対する寛容さが、彼らの周りのすべての人々を感化することになりました。たとえどんな隣りの部族、どんな肌の色、どんな宗教でも、その人たちは兄弟のように待遇されるに違いないということです。

今日、南フィリピンの、ミンダナオの広大なアチペラゴでは、ママルとタンブナウェイの子孫たちが住んでいます。

誇り高いティルライの人々は、ママルの血統であると伝わっていて、一方堂々としたマグインダナオの人びとは、タンブナウェイの子孫だと伝わっています。これらのふたつの堂々とした人々が、常に、彼らの先祖、ふたりの兄弟の重要な遺産を受け継いで住んでゆくように、祈りましょう。